

昭和8年(1933)
絹本着色
186.0×180.8cm
松阪市教育委員会蔵

やな
築

三重県松阪市に生まれ、
京都・円山四条派に学んだ宇田荻郎。
本作には、滋賀や岐阜、京都で描いた
築や水鳥の写生が残され、
応挙以来の伝統を継ぐ画家として
常に写生を重視した姿勢が感じとれる。

CHRONICLE
OF MIE
VOL. 8

【美術編】

山口泰弘 やまぐちやすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

築(梁)とは、河川の一部に木や竹を並べた仕切りをつくって魚の通路を塞ぎ、川の流れに沿って木や竹製のすこの状の台を傾けて設置し、泳いできた魚が打ち上げられたところを捕獲する漁の仕掛けをいう。この漁法は、東南アジアを中心に現在でも世界各地で見られるが、日本に伝わったのは弥生時代のことであったという。左の画は、日本画家宇田荻郎(1896~1980)が、この築を主題として描いた作品である。

宇田荻郎、本名は、宇田善次郎。明治29年(1896)に現在の三重県松阪市に生まれた。地元の日本画家中村左洲(1887~1953)について日本画の基礎を学んだ後、大正2年(1913)、京都に出て菊池芳文(1862~1918)、次いで菊池契月(1879~1955)に師事し、のちに京都市立絵画専門学校(現在の京都市立芸術大学)に学んだ。芳文・契月は、円山四条派の正系を継ぐ画家として知られる。円山四条派は、江戸時代中期、京都で円山応挙、呉春によって開かれ、写生を重視する画風で近代日本画の確立に大きな役割を果たした。

荻郎の関心は、清水・祇園・木屋町といった洛中や嵐山・山科など洛外の風景に振り向けられた。「夜の一角」(1919)、「南座」(1922)など京都の夜の街景を強い主観で描いた大正時代から、「祇園の雨」(1953)、「清水寺」(1957)など瀟洒な作風の戦後にいたるまで、常に写生を底流に保ちつつ洛中洛外の風光を描いていった。

「淀の水車」(1926)は、大正時代の暗い色調を捨てて、桃山時代の障屏画を彷彿させる作風に大きく舵を切った最初の作品と知られるが、「築」は、その方向性をさらに押し進めた作品で、昭和8年(1933)秋の第14回帝国美術展覧会に出品された。今日、荻郎を代表する作品とされ、群青や緑青、胡粉の白といった強い色面で構成された華麗で装飾的な美しさが際立つ。

しかしその一方で、写生をゆるがせにしない応挙以来の京都の画家としての姿勢は、この作品にも貫かれている。

荻郎が、この画を制作するにあたり、何をおいてもまず行ったのが写生であった。写生の場として最初に足を運んだのは滋賀県で、甲賀郡柏木村の野洲川筋で築の写生を始めている。現在残る写生帖(三重県立美術館蔵)の書き入れによると、それは昭和8年(1933)8月10日のことであった。3日後には、岐阜県の高治見の土岐川(庄内川)に場を移して築の写生にふたたび取り組んでいる。写生帖には築と川瀬、築の部材の細かな写生が、鉛筆と淡彩でさまざまな角度から描き残されている。

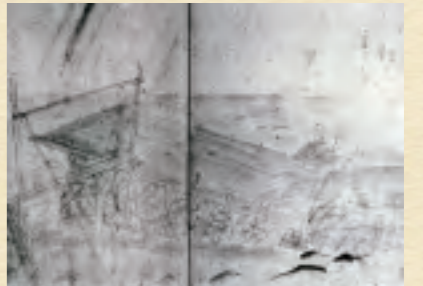
制作のための主な取材は、この旅行で一旦終えたものの、取材で得た下絵をもとに構想を練るうちに何らかの不足を感じ出したのか、同じ月の21日には、京都嵐山に出かけて大堰川で改めて築や川瀬の写生を行っている。さらに9月に入ると、ふたたび滋賀県に行き、野洲川の下流で築を再度写生するとともに、鮎や川鱒の写生も行っている。その後、京都市記念動物園(現京都市動物園)に出かけて、水鳥の写生を行っている。これは築の手前に点景として生かされることになる。

写生をもとに何段階もの下絵制作の過程を経てようやく完成するのが日本画の一般的な制作方法だが、「築」もその例に漏れない。完成に近づけば近づくほど、画面は装飾性を増し、写生の痕跡を探するのは難しくなるが、その根幹に息づくのは写生である。

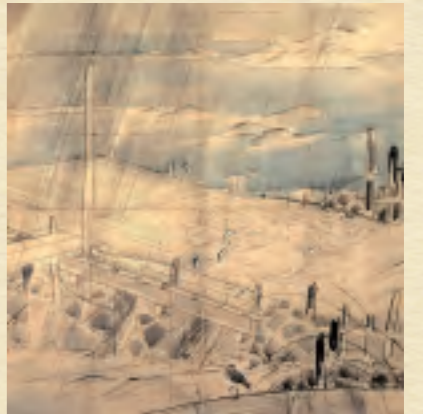
荻郎が師を通して学んだ遠祖円山応挙(1733~95)は、「すべては写生からはじまる」と主張し、鳥を望遠鏡で観察したことが知られている。その意味で、「築」は、荻郎が写生を根幹にすえる応挙以来の京都の伝統の正しい継承者であったことをものがたる。



写生帖から。滋賀県野洲川で、鮎の写生に取り組んだ。



写生帖から。土岐川で、8月13日に写生したことが、右上の書き入れでわかる。単なる写生というよりは、すでに完成画を意識して、左上に激しい雨脚らしい墨線を加えている。本画(完成作品のこと)では手前に立つ水鳥が、背後の石組みの上に立つ。完成にいたるまでの試行錯誤がうかがえる。



本画制作の直前に描かれた原寸大の下絵で、大下絵と呼ぶ。日本画では慣習的に大下絵を制作する。この段階で最終的なモチーフの配置を確定しなければならない。配置が気に入らない場合は、描いたモチーフの上に紙を貼るなどしてその上に書き直すこともある。本画用の画紙(画絹[えきぬ]の場合もある)と大下絵を重ね、その間に念紙(カーボン紙のようなもの)を挟んで輪郭線を転写する。